

# 概要報告

実施期日	7月29日(火) 【午後】
部会名	小学校 家庭部会

テーマ 『自分にできることをしようとする力を育てる家庭科教育を目指して』

## 提案概要

### 1. 実践に向けての課題意識

子どもたちは成長するにつれ、自分で食事を選ぶ機会が増えてくる。食べたいと思えば何でも手に入る現代の環境において、「何をどのくらい食べるか」という食品を選ぶ目や基準をもつことが、その人の食生活を大きく左右することになる。この学習を通して、子どもたちには日常の食事への関心を高め、食事の大切さに気付かせるとともに、栄養を考えた食事のとり方の必要性を理解させたいと考えた。

そこで、宿泊学習の朝食バイキングを疑似体験させることで、主体的に課題を意識させるようにした。食事の役割を理解し、自分の食生活を見つめ直したり、栄養を意識して食事を選んだりしようとする力につながるよう設定した。

### 2. 実践の概要

- ・カードを使って朝食バイキングを疑似体験させることで、自分が選んだ食事の栄養バランスについて課題意識をもたせる。
- ・それぞれの栄養素をキャラクター化した教材を使って、五大栄養素と食品の体内での主な働きについて分かりやすく理解させるとともに、組み合わせてとる必要があることに気付かせる。
- ・学習したことを活かして、再びカードを使って朝食バイキングの疑似体験を行い、基礎知識の定着を図る。
- ・ごはんのみそ汁の実習を通して、基礎・基本の知識と技能を身につける。

### 3. 成果と課題

朝食バイキングの疑似体験では、選んだ食品を栄養素の働きごとにシールの色で分類させたところ、自分の食事の偏りについて課題を意識することができた。その偏りをどのようにしてバランスの良いものにしていくかを、グループで話し合ったり資料を用いて調べたりして一人ひとりがよく考え、意欲的に取り組んだ。再度疑似体験をさせると、子どもたちはバランスよく食品を選ぶことができていた。「気づき」が活かされていたように思う。

今後はこの気づきをいかに継続させ、子どもたちが自分自身でできることを増やし、日常生活にいかに関与させるかが課題である。この課題を達成させたり課題に向けて取り組んだりすることで、子どもたちの豊かな生活が実現できると考えている。

## 質疑概要

<提案授業について>

- ・教材が一つ一つ丁寧に作られている。実際に子どもたちが触れる食材カードがカラーなので、調理実習でなくても、興味をもって取り組むことができるのではないかと感じた。
- ・提案資料の「何を選んで食べるか」ということは、すごく大切だと感じた。
- ・今回の教具は、リアルなものがあるとよりよいという意見と、支援級の先生からのアイデアを参考に作成した。みんなで一度作ると、ずっと使っていけるという点が一番大きかった。
- ・今まで5年生で栄養の授業をするときには、提案授業とは逆に五大栄養素の授業から取り組んできた。しかし、提案授業のように、自分で選んだ食材の栄養バランスを先に知ることによって、子どもたちがより五大栄養素を意識できるので、とてもよいと感じた。
- ・家庭でさえも食事への意識が薄れていると書かれているが、家でもバランスのとれていない子がいるのが現状である。このような授業をすることで、子どもたちの意識も変わるのではないかと感じた。

<質問>

- ・教具がパウチされているが、中身が見えないようになっているのはどうしてか。  
→中に入っているものの色を意識させたかった。そのためは、疑似体験させた後に色が見えるということで、子どもたちが興味をもちやすいと考えた。

- ・教具は何枚くらい作ったのか。→一クラスで使える分作成してある。
  - ・この授業をしたことで、実際に家庭で活かされたという事例は何かあったか。
- 「朝食は、コーラとポテトチップス」という子がいたが、授業後は、「コンビニで買ったおにぎりとおレンジジュースを食べた。」と話してくれた。子どもが自分で栄養を意識することができたことがよかった。

## 研究協議概要

### ①実践的・体験的な活動を取り入れ、課題意識をもたせる授業づくりの工夫

#### <実習を通して>

- ・5年生で最初のお茶入れの実習をする前に、ティーパックやお茶などいろいろな準備をして、「家ではどうやってお茶を入れる？」というところから活動して、おいしいお茶の入れ方につなげた。
- ・だし教室（にぼし・こんぶ・かつおぶし）や味噌の味くらべ（各家庭から味噌を持ち寄ってきゅうりにつけて食べる）等、違いを実感させる活動をした。
- ・CCレモン作りで、自分たちがおいしいと感じるまでスティックシュガーを入れるとどうなるだろうと試させた。入っている糖分の量を実感できた。
- ・天然着色料と人工着色料の色のつき具合の実験をして、体内に入る食べ物の色について意識づけをした。

#### <掃除を通して>

- ・6年生が家庭科で『きれいにしようクリーニング大作戦』で、校内の汚れチェックを実施した。掃除用具を考えさせることから始め、家庭から掃除に使えるものを持ってくるように声をかけたら、どこをどうやって掃除すればいいのかを考えて掃除するようになった。

### ②実践意欲を高める、家庭との連携の仕方

#### <宿題を活用して>

- ・夏休みの宿題で、料理や裁縫なんでもいいので実践をするという課題を出した。家庭から一言もらうと、お家の方も意識してくれるのでよい。

#### <通信を活用して>

- ・家庭科通信として、授業での振り返りシートをのせたり、夏休みの宿題の説明をのせたりする。
- ・学年だよりで保護者に技術指導のお手伝いをお願いしたり、宿題をどのような意図で出しているのかを伝えたりしている。

## まとめ概要

- ・教科書に書かれていることを学校で実践するということが大切。経験が少ない子が多いので、低学年のうちからぞうきんのしぼり方などを指導していけるとよい。
- ・手作りのよさを感じることで、家でもやってみようというきっかけづくりのできる教科である。
- ・連携が難しい家庭もある。家庭を変えることはできないが、学習する前と後で子どもに変化があるとよい。子どもに伝えて自分で意識できるようにさせていくことが大切である。
- ・知識・技能の習得だけでなく、食生活への興味関心をもたせることが大事。
- ・関心・意欲を引き出す方法として、本物に出会うという体験を大事にしたい。本物に出会い、その素晴らしさに触れるということは、「やってみたい！」という気持ちを高めるにつながる。
- ・家庭科は中学校と合わせて5年間の指導の見通しが大切である。具体的に、この授業ではどんな基礎基本を身に付けさせるのか、指導計画のどこで重点化して指導していくのかということを確認にしていくことが必要である。
- ・家庭と連携するためには、「こういうねらいで、こんな学習をしています。」ということをしっかり発信していくことが大切。一緒にやるという機会をなかなかもてなかった家庭も宿題や通信を通していいチャンスになる。その経験が、子どもたちの日常につながるものになる。